＜修士論文概要＞

中学校美術科における教育的意義と教員の役割
―学校と美術館の連携に着目して―

近藤　恵子*

１．問題の所在

今日の美術科の授業は、制作中心であると指摘されている。それは、美術科の教科目標にある「美術を愛好する心情を育てる」ことにつながっているのだろうか。制作中心の授業について自由や自主的な創造性を尊重することは重要であるが、美術科教員は、子どもたちの状況や置かれた環境に目を向けておらず、「自由」な活動にとらわれてしまっている。また、制作活動の結果として作品の完成度を指標にした得意不得意が美術科の苦手意識の原因となっていることがわかる。さらに「人と比べて劣等感を感じてしまう」ことが影響していることも明らかになっている。教科としての位置づけから「制作」という行為が成績を伴った技術的な問題に矮小化され、本来の目的である「自由で主体的」な「表現」という観点が欠落している点に問題がある。このような状況を踏まえた上で、美術科教員は授業を検討していかなければならない。

近年になって、制作中心の授業から表現活動中心の授業計画が注目され、とくに鑑賞活動における美術館との連携が広がっている。2008 年改訂の中学校学習指導要領、美術科鑑賞分野においても「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」とされている。全国では、鑑賞分野だけではなく、アーティストと関わりながら、作品を創作するなど様々な活動が実施されている。しかし、美術館職員の立場から見て、学校教員との相互交流は難しく、両者の意思疎通が出来ていないと考えられている。美術科が「役に立たない教科」論を乗り越えていくためには、改めて教科としての美術科の意義を問い返さなければならない。その際に鍵となるのは、学校外、とくに美術館との連携の可能性とその意義、そして「制作」をいかにして「自由で主体的」な「表現」活動へと転換させていくかという美術科の教育的意義の再検討であると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、事例をもとに中学校美術における美術館との連携における取組と課題を明らかにするとともに、美術科の教育的意義と求められる教員の役割を明らかにすることである。そのために以下の研究課題を設定する。

【研究課題１】中学校と美術館の連携における取り組みを明らかにする。

【研究課題２】水戸市の事例から、学校や教員が抱える課題や連携を阻害する要因を明ら

*筑波大学大学院修士課程教育研究科スクールリーダーシップ開発専攻２年

かにするとともに、どのような目的をもって連携をしているのかを明らかにする。
【研究課題３】横浜市の事例から、学校や教員が抱える課題や連携を阻害する要因を明らかにするとともに、どのような目的をもって連携をしているのかを明らかにする。
【研究課題４】課題２、３をもとに、美術科の教育的意義と求められる美術科教員のあり方について検討し、明らかにする。

３．研究の方法

【研究課題１】全国の美術館の資料やHPの情報をもとに、学校と美術館の連携方法を類型化する。また連携における課題を解消した事例について分析する。
【研究課題２】水戸芸術館現代美術センター教育普及担当者 2 名と、水戸市内公立中学校での勤務経験がある美術科教員３名へのインタビュー調査を実施する。
【研究課題３】横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局スタッフ２名、横浜美術館教育普及担当１名、横浜市内中学校美術科教員１名へのインタビュー調査を実施する。
【研究課題４】上記の結果から考察する。

４．論文構成

序章
　第１節　研究の背景と問題の所在
　第２節　先行研究の検討
　第３節　研究の目的と課題
　第４節　研究の方法と論文の構成
第１章　学校と美術館の連携　美術館の取り組み
　第１節　全国の連携の状況
　第２節　コーディネーターによる課題の解消
　第３節　考察
第２章　事例分析①－茨城県水戸市「水戸芸術館」の学校連携を対象にして－
　第１節　事例の概要
　第２節　調査概要
　第３節　課題解消に向けた取り組み
　第４節　現代美術から受け取るもの－あーとバスの教育的効果－
第３章　事例分析②　神奈川県横浜市「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」を利用した学校連携を対象にして
　第１節　事例概要
　第２節　調査概要
　第３節　課題解消に向けた取り組み

第４節　顔が見える連携を目指して
第４章　美術科の教育的意義と教員の役割
第１節　美術科の教育的意義
第２節　美術科教員の役割
終章　まとめと今後の課題
第１節　本研究のまとめ
第２節　今後の課題

５．論文概要

第１章　学校と美術館の連携　美術館の取り組み

全国の美術館の資料やHPの情報をもとに、美術館が行っている学校との連携活動について明らかにした。美術館では、教育普及プログラムの一つとして学校との連携に取り組んでいる。連携内容は、授業として連携するものから、教員に美術館の活用方法を知ってもらうものまでさまざまであった。連携をする形として、美術館を訪問する「美術館鑑賞教育型連携」、美術館のアウトリーチ活動として実施する「出張授業型連携」、授業実施以外の活動として「教材貸出連携」「教員向け研修プログラム」、長期にわたって活動を行う「連携モデル校事業」の５つに分類することができた。しかし、子どもたちに芸術への理解や関心を深めてもらうために工夫を凝らして学校との連携を模索しているものの、学校側でうまく活用できていないことが明らかとなった。

さらに、このような美術館と学校の相違点を調整する立場としてコーディネーター役を配置した事例を取りあげ、成果と課題を明らかにした。コーディネーター役がいることにより、学校と美術館間のやり取りや意思疎通がスムーズになっている。しかし、美術館、コーディネーターが工夫をすればするほど、教員の受け身の姿勢につながっており、教員の積極性を引き出す取り組みが必要であると示唆された。

第２章　事例分析①－茨城県水戸市「水戸芸術館」の学校連携を対象にして－

水戸芸術館では「あーとバス」というバスの手配事業を行うことで、学校へのアウトリーチや生徒の送迎など移動の問題をクリアしている。また研修を実施することでボランティアガイドの育成に力を入れている。この結果、学校とは異なった場を作り、子どもたちが感じたままの言葉を引き出すことが出来ている。

一方、美術科教員が抱える大きな課題として、学校内の調整が連携の大きな課題であることが明らかになった。連携を行っている教員もそれらの調整に苦労していたが、「学校ではない場所で、先生ではない人と関わる」ということから教育的意義を見出し実施にこぎつけている。

第３章　事例分析②－神奈川県横浜市　横浜市芸術文化教育プラットフォームを利用した学校連携を対象にして－

横浜市芸術文化教育プラットフォームでは、アーティストを派遣するなど効果的な連携プログラムをパッケージングして提供する仕組みを作っている。その結果、教員側の手続き等の負担は軽減され、学校側の受け入れやすさ、連携授業の実施のしやすさにつながっていることが明らかとなった。

横浜美術館はアーティストと学校を繋ぐコーディネーターの一つである。アーティストのことを知っている横浜美術館が間に入ることで、アーティスト自身が授業計画に関わることが可能になり、専門性や技術だけでなく、こだわりや信念などを伝えることにつながっていた。

美術科教員も人と出会うこと、そして美術館という場所の魅力に触れることの大切さを実感し、そのきっかけを美術科の授業で作ろうと連携活動に取り組んでいた。そのため横浜美術館では、美術館の作品をテーマに授業案を検討する研究会を実施している。実現が難しいと思われる授業案であっても、美術館スタッフや教育委員会と協力し、実現に向けて試行錯誤していた。このように美術科教員自身が楽しみながら前向きに構想を練る様子を本人たちは「妄想」と表現していた。この「妄想」をし、難しいことを可能にしていく姿が今後の美術科に必要であると考えた。

第４章　美術館の教育的意義と教員の役割

水戸、横浜の２つの事例を通して、美術館は、芸術品を展示している場所にとどまることなく、美術館という施設を通した人との出会い・つながりがある、という共通点を見出した。作品はその多様性を視覚で認識するツールであり、美術館はその作品を通して感じたさまざまな思いや感情を受け止める場所であり、認める場所でもあると考える。本来であれば、学校の美術科の授業が自由な表現を受け止める場所であるべきだ。しかし、中学生は学校という規範の中で、他者の視線を気にしながら生活しており、周りから見て正しい表現をすることを選んでしまう。美術科では、自分が伝えたいことを見つめ直し、それを受け取る人の捉え方を考え、表現を検討する機会を作る必要があるだろう。学校という枠組みから飛び出す美術館との連携は、子どもたちの自己表現を取り戻す、一つのきっかけであると考える。

連携の意義として美術館という施設を通した人との出会いやつながりによって、思春期にある中学生が学校という規範を相対化し、自己表現をすることの意義を感じ取ることにつながっていると示唆された。これらのことから、美術科の教育的意義は、「自己を取り戻す」「多様さを知る」「『伝える』と『受け取る』を考える」の３点であるとした。

また教員のインタビューから、これらの教育的意義を持たせるには、美術科教員自身も美術を楽しみ、学習指導要領に束縛されず自ら楽しいと思える授業計画を「妄想」することの重要性が明らかとなった。そのためには、生徒のことをよく知り、周囲との協力関係を作ることが必要である。

理学者の金沢(2006)は「妄想」が持つポジティブな面について、「何か、新しいことを創

り出す力、考えもしなかったことを実行する能力。そうしたどこか突き抜けた力」としている。教員は「妄想」をもとに自分だけでは出来ない授業を、美術館と協力することで実施可能にしていく。この課程から指摘にもある「教員の自主性」は理想の授業を「妄想」をすることから生まれてくると考える。

また授業案を作成する上で、生徒と日々接している中で感じ取った情報をふまえる必要がある。担任、学年職員など、多くの人と情報交換をすることで、授業時の声掛けや美術の評価だけではなく、美術以外の部分で評価をする機会にもつながる。美術科の評価観点項目にこだわることなく、幅広い視点を持って生徒と関わること、さらにそのために協力関係を構築することが美術科教員に求められている。

これらのことから、教員の役割は、「新しい美術科を『妄想』する」、「評価の枠の外で生徒を見る」、「協力関係を構築する」の３点であるとした。生徒と日々接している美術科教員が、担任や学年主任などの同僚教員や美術館のスタッフなどと情報交換を密にしながら、美術の時間を生徒に非日常をもたらす時間に変えていくことが連携の教育的意義だと指摘した。

終章　まとめと今後の課題

本研究のまとめとして本論文の要約を行い、本研究により明らかになった知見を整理した。また今後の課題を提示した。

事例から、美術科で求められる自由で自主的な表現とは、周囲に抑圧されることなく感じたことを表現することであると示唆される。周囲の目を全く気にしないということは難しいが、自分が感じていることを自身が受け止める過程が必要であろう。美術館との連携によって、その機会を作ることが可能であることが明らかになった。美術科教員は連携授業を実施する際、目の前の仕事と連携に伴う調整等の負担を考える。しかし、連携の形は様々あり、それらを有意義なものにできるかどうかは、美術科教員の捉え方によるものである。美術科教員には、楽しみながら理想を追求していく「妄想」の力で、学校内外と協力し授業を作り上げていくことが求められている。まず、美術科教員の葛藤や理想を共有することから、美術館との連携は始まり、授業の充実に向かう道筋に繋がると考える。

更に今後の展望として、今回は美術科教員の語りをもとに美術科の教育的意義と教員の役割を明らかにしたが、まず生徒たちが美術の授業をどのように捉えているか、教員にどのような役割を求めているかを明らかにすることが必要であろう。連携授業に関しては、学校内の協力関係構築が不可欠である。そのため管理職をはじめとした、他教科の教員から見た美術科についての検討も必要であろう。

６．主要参考文献

・石川誠「学校と美術館の連携の意味するもの」『アート・エデュケーション』第 30 号、建帛社、2000 年、pp. 47-58

・石川誠「学校と美術館の連携に関する考察Ⅰ―美術館教育普及担当者への調査から―」『美術教育学　美術科教育学会誌』第 22 巻、2001 年、pp. 13-28
・金沢創「妄想力―ヒトの心とサルの心はどう違うのか―」光文社、2006 年、p. 213
・富山祥瑞「教科としての『図画工作・美術』が抱える課題―教育学部・大学生の回想による調査報告―」『愛知教育大学研究報告、教育科学編』第 62 巻、2013 年、pp. 207-214
・半直哉「美術館における教育現場との連携に関する意識」『山陽短期大学紀要』第 36 巻、2007 年、p. 62
・降旗孝「図画工作・美術への〔意欲〕・〔苦手意識〕の実態と考察―次号・生徒・大学生への実態調査結果から―」『山形大学紀要（教育科学）』第 16 巻第 2 号別刷、2015 年、pp. 109-117